

# Oracle Reports Developer for Windows

スタート・ガイド

リリース 6i

2000 年 4 月

部品番号 : J00454-01

ORACLE®

---

Oracle Reports Developer for Windows スタート・ガイド, リリース 6i

部品番号 : J00454-01

原本名 : Oracle Reports Developer Getting Started for Windows Release 6i

原本部品番号 : A73156-01

原本著者 : Carol Roston

原本協力者 : F. John Bethkey, Marcie Caccamo, Ken Chu, Pat Hinkley, Karen Denchfield-Masterson, Frank Rovitto, Ingrid Snedecor

Copyright © 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

#### 制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

\* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

#### 危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

#### Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

---

---

# 目次

はじめに .....	vii
------------	-----

## 第 I 部

### 1 インストールの準備

1.1	製品の内容 .....	11
1.2	ハードウェアおよびソフトウェアの要件 .....	12
1.2.1	Reports Developer .....	12
1.2.2	関連ソフトウェア .....	12
1.3	Oracle 製品のインストール先 .....	13
1.4	新規インストールとアップグレードの相違点 .....	14
1.5	Web およびクライアント / サーバー環境での実行方法 .....	14
1.6	リリース・ノートの確認 .....	15
1.6.1	リリース・ノートの入手方法 .....	15
1.6.2	リリース・ノートの参照方法 .....	15

### 2 新規購入の場合のインストール

2.1	設計時コンポーネントのインストール .....	17
2.1.1	ステップ 1: Reports Server パラメータの指定 .....	17
2.1.2	ステップ 2: Oracle Installer の起動 .....	18
2.1.3	ステップ 3: インストール設定の選択 .....	18
2.1.4	ステップ 4: アプリケーションの選択 .....	18
2.1.5	ステップ 5: インストール方法の選択 .....	19
2.2	ランタイム・コンポーネントのインストール .....	21

2.3	Oracle サーバーへの接続 .....	22
2.3.1	ステップ 1: サーバーのインストール .....	22
2.3.2	ステップ 2: TNS 名の指定 .....	22
<b>3</b>	<b>アップグレードする場合のインストール</b>	
3.1	製品のアップグレード .....	25
3.1.1	バージョンに関する問題 .....	25
3.1.2	Oracle Installer の実行 .....	26
3.1.3	サーバーに関する考慮事項 .....	26
3.2	ユーザー・アプリケーションのアップグレード .....	27
3.2.1	作成したアプリケーションの Web への再配布 .....	28
<b>4</b>	<b>アンインストール</b>	
4.1	Reports Developer 製品の削除 .....	29
4.1.1	サービスの停止 .....	29
4.1.2	Reports Developer の削除 .....	30
<b>5</b>	<b>アプリケーションを格納する表の設定</b>	
5.1	データベース表の作成 .....	31
5.1.1	ステップ 1: Oracle Installer による SQL スクリプトのインストール .....	32
5.1.2	ステップ 2: Oracle Developer のデータベース表の作成 .....	32
5.2	データベース表の適切な使用方法 .....	33
5.3	ユーザー・アクセス権限の付与と取消し .....	33
5.3.1	データベース表に対するアクセス権限の付与 .....	33
5.3.2	データベース表に対するアクセス権限の取消し .....	34
5.4	データベース表の削除 .....	34
5.5	データベース表のアップグレード .....	35
5.5.1	ステップ 1: データベースの内容のバックアップ .....	35
<b>6</b>	<b>インストール後の作業</b>	
6.1	Reports Developer アプリケーションを初めて開発する場合 .....	39
6.2	Reports Developer アプリケーションの開発に慣れている場合 .....	39

## 第 II 部 付録

### A Oracle Express

A.1	Oracle Express を使用するための Reports の構成 .....	43
A.1.1	クライアント側の構成 .....	45
A.1.2	サーバー側の構成 .....	45
A.2	Express データのバッファ・サイズ .....	47
A.2.1	デフォルトのバッファ・サイズ .....	47
A.2.2	バッファ・サイズ .....	48
A.2.3	バッファ・サイズの指定 .....	48
A.2.4	バッファ・サイズの設定例 .....	48
A.3	シングルバイト・キャラクタ・セット .....	49
A.3.1	Oracle Express からのキャラクタ・セットの指定 .....	49
A.3.2	キャラクタ・セットの設定例 .....	49
A.3.3	言語 .....	49
A.3.4	地域 .....	51
A.3.5	格納キャラクタ・セット .....	54
A.4	Oracle Express データの数値の範囲 .....	60
A.4.1	非常に大きい正数または負数 .....	60
A.4.2	非常に小さい数値の丸め .....	60
A.4.3	丸め設定の指定 .....	60
A.4.4	丸めの設定例 .....	61
A.5	階層構造の Express データのインデント .....	61
A.5.1	階層データの設定例 .....	62

## 第 III 部 索引

### 索引



---

# はじめに

Oracle Reports Developer へようこそ。このマニュアルには、Reports Developer for Windows の使用を開始する際に役立つ情報が記載されています。

## 前提条件

使用しているコンピュータおよびそのオペレーティング・システムについて精通している必要があります。たとえば、ファイルの削除およびコピーのコマンドの知識があり、検索パス、サブディレクトリおよびパス名を概念を理解している必要があります。詳細は、Microsoft Windows の製品マニュアルを参照してください。

アプリケーション・ウィンドウの要素などの Microsoft Windows の基本要素も理解している必要があります。エクスプローラ、タスクバー、タスクマネージャまたはレジストリなどのプログラムに精通している必要があります。

## 表記規則

このマニュアルでは、次のような表記上の規則を使用しています。

規則	意味
固定幅フォント	固定幅フォントのテキストは、表示されたとおりに入力するコマンドを示します。PC に入力するテキストでは、特に断りのない限り大文字と小文字を区別しません。 コマンドでは、大カッコ ( [ ] ) と縦線 (   ) 以外の句読点は表示されているとおりに正確に入力する必要があります。
小文字	コマンド文の小文字は変数を表します。適切な値に置き換えてください。
大文字	テキスト内の大文字は、コマンド名、SQL 予約語、キーワードを表します。

規則	意味
カッコ (「 」)	カッコ (「 」) 内のテキストは、メニュー選択項目やボタンなど、ユーザー・インタフェース項目を表します。
C>	C> は DOS プロンプトを表します。実際とは異なる場合があります。

## インストールのための関連資料

このマニュアルを参照して製品をインストールする前に、リリース・ノートを読んでください。(製品の CD-ROM にファイルとして含まれる) リリース・ノートには、インストール作業に関係する可能性のある、最新の情報が記載されています。

作成したアプリケーションを Web 上に配布する場合は、Reports Server もインストールする必要があります。(Reports Server のライセンスは別途必要です。) サーバーのインストールは、この『スタート・ガイド』マニュアルの指示をすべて実行してから行います。この追加的なステップは、『Oracle Reports Developer パブリッシング・レポート リリース 6i』(部品番号 :J00618-01) で説明しています。

CD-ROM には、Oracle Reports Developer および Oracle Reports Server 製品も収録されています(ライセンスは別途必要です)。これらの製品には、専用の『スタート・ガイド』マニュアルが用意されています(CD-ROM に収録されています)。



# 第 I 部

---



---

# インストールの準備

この章では、以降の章で説明する実際のインストールおよび設定作業に役立つ、製品の概要および前提となる知識を説明します。

## 1.1 製品の内容

CD-ROM には、次のものが含まれています。

- Oracle Installer。
- Reports Developer ソフトウェア：
  - Report Builder (設計時コンポーネント、コンパイル時コンポーネントおよびランタイム・コンポーネントのすべてを含む)。
  - Reports Developer ファミリーのその他の Builder。
  - 制限付きライセンスが付与された Report Server コンポーネント。このライセンスにより、テスト目的で Web にアプリケーションを配布できます。
- 次のサポート製品：
  - Oracle Net8 Client。
  - SQL\*Plus、Oracle Jinitiator。
  - Oracle OCX Pack。
  - Information Navigator。
- 様々なオンライン・マニュアル。(この『スタート・ガイド』マニュアルも含まれます。)
- (個々のファイルとして、または各 Builder を通して参照できる) オンライン・ヘルプと、クイック・ツアーおよびキュー・カード。
- 重要な最新情報を含んでいるリリース・ノート・ドキュメント。

## 1.2 ハードウェアおよびソフトウェアの要件

Oracle Reports Developer および関連する Oracle ソフトウェアを使用するには、この項で説明するハードウェアおよびソフトウェアが必要です。

### 1.2.1 Reports Developer

Reports Developer を快適に使用するには、次のハードウェアおよびソフトウェアが必要です。

#### 1.2.1.1 ハードウェア

Reports Developer は、Pentium 以降のプロセッサを備えた IBM PC、またはその 100% 互換機にインストールして使用するよう設計されています。インストール・プロセスでは、論理ドライブとして認識されている CD-ROM ドライブも必要です。モニタ、プリンタおよびマウスの要件は、Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。

#### 1.2.1.2 オペレーティング・システム

このバージョンの Reports Developer は、Microsoft Windows 上で動作します。具体的には、次のバージョンで動作します。

- Windows 95 (すべてのバージョン)
- Windows 98 (すべてのバージョン)
- Windows NT 4.0 (Service Pack 5 以降)

#### 1.2.1.3 設計時における RAM の要件

Reports Developer 製品の設計ツールおよびコンパイル・ツールをインストールして使用するには、128MB の RAM を推奨します。ただし、作成したプロジェクトはそれ以下のメモリで快適に動作する可能性もあります。

#### 1.2.1.4 実行時における RAM の要件

作成した Report アプリケーションの実行に必要な RAM 容量は、次の条件によって異なります。

- アプリケーションの配布先の形態 (Web/3 階層またはクライアント / サーバー)
- レポート自体のサイズおよび複雑さ

### 1.2.2 関連ソフトウェア

この項で説明しているソフトウェアは、同一マシン上で実行することも、別マシン上で稼働しているサーバーで実行することもできます。

### 1.2.2.1 データベース・サーバー

Reports Developer は、次に示すデータベース・サーバーを使用するよう設計されています。

- Oracle8 ( 8.0.5 または 8.0.6 )
- Oracle8i ( 8.1.5 または 8.1.6 )

サーバーを使用するには、Net8 for Windows も必要です。

Personal Oracle for Windows または Personal Oracle Lite をサーバーとして使用することもできます。ただし、最も堅牢なシステムとしてお薦めできるのは Oracle8 または Oracle8i です。

非 Oracle データベース・サーバーに同等の機能があれば、それをサーバーとして使用することもできます。

### 1.2.2.2 Web サーバー

アプリケーションを Web ( 3 階層環境 ) に配布する場合は、リスナーとして動作する Web サーバーも必要になります。

Reports Developer の CD-ROM で提供している Oracle WebDB Listener を利用するのが手軽な方法ですが、どのような Web サーバーでも使用できます。CGI ( Common Gateway Interface ) 形式およびカートリッジ形式のリスナーをサポートしています。

Reports Developer のこのリリースで Oracle Application Server ( OAS ) をリスナーとして使用する場合、OAS リリース 4.0.8 以降が必要です。

## 1.3 Oracle 製品のインストール先

Oracle 製品は、ORACLE\_HOME というインストール・ディレクトリに格納することを前提としています。

Reports Developer および関連製品のインストール時に、製品のインストール先である ORACLE\_HOME の位置を決定するよう要求されます。決定する際には、次の事項を考慮してください。

- Reports Developer 6i は、デフォルトである ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。
- Reports Developer 6i および Oracle8/8i サーバーは、物理的に同一のマシン上にインストールすることができますが、別々の ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。
- 同様に、Web アプリケーションの実行環境でも Report Server および Oracle Application Server を物理的に同一のマシン上にインストールすることができますが、別々の ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。

この Reports Developer リリース 6i をインストールするのみでなく、旧バージョンの Oracle Developer（この製品の旧称）も残しておく場合は、次の事項に注意してください。

- Oracle Developer 1.6.1 および Reports Developer 6i は、同一の ORACLE\_HOME に共存できます。
- Oracle Developer 2.1 および Reports Developer 6i は、同一の ORACLE\_HOME に共存できます。
- Oracle Developer 1.6.1 および Oracle Developer 2.1 は、同一の ORACLE\_HOME に共存できません。
- Oracle Developer 6.0 および Reports Developer 6i は、同一の ORACLE\_HOME に共存できません。

## 1.4 新規インストールとアップグレードの相違点

Reports Developer を新規に購入し、初めてインストールする場合、詳細な解説を用意しています。第 2 章から読んでください。

この製品の旧バージョンを所有しており、この現行バージョンにアップグレードする場合、インストール・プロセスはこれまでとほぼ同様です。アップグレードのための説明を参照するには、第 3 章に進んでください。作成済みの既存のアプリケーションをこの新バージョンで実行するには、再コンパイルも必要です。第 3 章は、それに関する情報も提供しています。

## 1.5 Web およびクライアント / サーバー環境での実行方法

次の 2 つの環境を設定する必要があります。

- **開発環境**（コンパイル処理も含む）。これは、開発者がレポートを作成する環境です。この環境には、Reports Developer 製品のビルドおよびコンパイル・コンポーネントも含まれます。

開発環境の設定については、このマニュアルの以降の章ですべて説明しています。

- **実行環境**。これは、完成したレポートをエンド・ユーザーが実行する環境です。この環境には、Reports Developer アプリケーションのみでなく製品のランタイム・コンポーネントも含まれます。

- **Web 実行環境**：作成したレポートの配布に Web を利用すると、いくつかの利点が見られます。保守が 1 箇所ですぐに行え、クライアント・マシン上の格納デバイスのオーバーヘッドもなく、能力の高いサーバーを利用して処理できます。

作成したアプリケーションを Web、つまり 3 階層環境で実行する場合には、開発環境のインストール後、さらにいくつかの手順が必要になります。これらの手順では、中間層における Report Server コンポーネントをインストールし、チューニングします。これらの追加的な手順は、『Oracle Reports Developer パブリッシング・

レポートリリース 6i』（部品番号 J00628-01）で説明しています。WebDB リスナーの構成については、『Oracle WebDB インストレーション・ガイド』（部品番号 J01168-01）で説明しています。

- **クライアント/サーバー環境:** 作成したアプリケーションをクライアント/サーバー環境で実行する場合の環境設定に必要な指示は、すべてこのマニュアルの以降の章に含まれています。

## 1.6 リリース・ノートの確認

Reports Developer 製品コンポーネントのインストール前に、製品の最新情報が記載されているリリース・ノートを必ずお読みください。

リリース・ノートには、この『スタート・ガイド』マニュアルの印刷後に判明した最新の情報が記載されています。インストール手順またはシステムの要件に関する変更が記載されている可能性があります。また、製品に関する既知の問題点も示されています。

### 1.6.1 リリース・ノートの入手方法

英語版リリース・ノートは、製品の CD-ROM に格納されています。リリース・ノートを参照する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Installer を起動します。
2. 「Oracle インストール設定」で会社名を入力し、使用する言語を選択します。
3. 「インストール・オプション」ダイアログ・ボックスで、「カスタム・インストール」を選択します。
4. 使用可能な製品のリストから *Oracle Reports Release Notes* を選択します。
5. 「インストール」を選択します。
6. インストールが完了したら Oracle Installer を終了します。

### 1.6.2 リリース・ノートの参照方法

リリース・ノートを参照する手順は、次のとおりです。

1. %ORACLE\_HOME%\TOOLS\DOC60 で relnoter ファイルを探します。%ORACLE\_HOME% は、製品をインストールしたディレクトリです。リリース・ノートは、テキスト形式および PDF 形式のものが参照できます。
2. テキスト・ファイルをオープンするには、relnoter.txt をダブル・クリックします。使用しているデフォルトのテキスト・エディタで、ファイルがオープンされます。
3. Acrobat 4.0 以降をインストールしている場合は、relnoter.pdf をダブル・クリックして PDF ファイルをオープンします。

リリース・ノートを参照して最新の変更の有無を確認した後は、製品のインストール・プロセスを開始できます。



---

## 新規購入の場合のインストール

この項では、以前のバージョンをインストールしていない環境に Reports Developer をインストールする手順を説明します。Reports Developer には、設計時コンポーネントとランタイム・コンポーネントがあります。開発用マシンには、両方のコンポーネントをインストールする必要があります。インストールすると、新しいレポートを作成できるとともに、それらをテストできます。完成したレポートを実行するマシンには、実行環境をインストールする必要があります。Web サイトから実行する場合にも、実行環境をインストールします。

### 2.1 設計時コンポーネントのインストール

Reports Developer の開発用コンポーネントをインストールする手順は、次のとおりです。

#### 2.1.1 ステップ 1: Reports Server パラメータの指定

Oracle Reports Developer には、Oracle Reports Server の制限付きライセンスも付属しています。このライセンスにより、開発者は開発中のレポートをテストすることができます。Reports Server のパラメータは、Oracle Installer によるインストール処理の際に指定します。

1. Reports Server の TNS サービス名を指定します。開発用システムにインストールするサーバーの名前は、一意である必要があります。Oracle Installer により、デフォルトの名前が指定されます。
2. ポート番号を指定します。このポート番号は、ほかのプロセスで使用されていない番号にする必要があります。このリリースのデモ・レポートでは、ポート番号 1949 を使用しています。

**注意：**Web DB Listener をインストールしている場合、同一のポート番号を指定しないでください。

## 2.1.2 ステップ 2: Oracle Installer の起動

### 2.1.2.1 自動実行機能

Oracle Installer for Windows は自動実行機能を備えており、CD-ROM を挿入すると `setup.exe` が自動的に実行され、Oracle Installer が起動します。通常は、この自動実行機能を利用してインストールすることをお勧めします。

**注意:** 古い CD-ROM ドライブには、自動実行機能をサポートしていないものもあります。Oracle Installer が自動的に起動しない場合は、2.1.2.2 項「自動実行機能を使用しない場合の Oracle Installer の起動」のステップ 2 以降の手順に従ってください。

### 2.1.2.2 自動実行機能を使用しない場合の Oracle Installer の起動

自動実行機能を使用せずに Oracle Installer を起動するには、次のステップを実行します。

1. [Shift] キーを押しながら CD-ROM を挿入し、自動実行機能を無効にします。
2. アクティブな Windows アプリケーションをすべて停止します。
3. 「スタート」 「ファイル名を指定して実行」を選択し、「ファイル名を指定して実行」ダイアログ・ボックスを表示します。
4. 「ファイル名を指定して実行」ダイアログ・ボックスで次のように入力します。

`x:¥SETUP.EXE`

ここで `x` は、CD-ROM ドライブに使用されているドライブ文字です。

5. 「OK」をクリックして、Oracle Installer を起動します。「Oracle インストール設定」ダイアログ・ボックスが表示されます。

## 2.1.3 ステップ 3: インストール設定の選択

「Oracle インストール設定」ダイアログ・ボックスが表示されたら、次の手順に従ってインストール設定を選択します。

1. 企業名を入力します。
2. ORACLE\_HOME は、あらかじめ DEFAULT\_HOME に設定されています。このデフォルト設定は変更しないでください。
3. 「言語」は、Oracle Reports Developer で使用する言語を選択します。

## 2.1.4 ステップ 4: アプリケーションの選択

この『スタート・ガイド』では、Oracle Reports Developer のインストール作業を説明します。別の製品をインストールする場合は、インストール・プログラムを複数回実行する必要があります。Oracle Forms Developer および Oracle Forms Server のインストールは、『Oracle Forms Developer for Windows スタート・ガイド』( 部品番号 J00453-01 ) で説明し

ています。Oracle Reports Server の通常のインストール手順は、Reports Developer と同様です。ソフトウェアをインストールしたら、設定を行う必要があります。設定については、『Oracle Reports Developer パブリッシング・レポート リリース 6i』（部品番号 :J00618-01）を参照してください。

1. 「Oracle Reports Developer」を選択します。

## 2.1.5 ステップ 5: インストール方法の選択

Oracle Installer により、開発環境を設定するための選択肢が 2 つ表示されます。

- 標準インストール
- カスタム・インストール

### 2.1.5.1 標準インストール

このオプションを選択すると、設計時コンポーネントおよびランタイム・コンポーネントの両方がインストールされ、開発者は作成したアプリケーションをテストできます。

次の手順に従ってください。

1. インストール画面で「**標準インストール**」を選択し、「OK」をクリックします。
2. 「Test Reports Server インストール・オプション」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。
3. Oracle Enterprise Manager (OEM) を使用していない場合は、「**プロセスの起動**」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックして、必要なサービスをこのときに作成し、開始します。
4. 「**概要**」ダイアログ・ボックスに表示されたテキストを読み、「OK」をクリックします。
5. 「System Support Files」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックして、Windows ファイルをアップグレードします。これらは標準的な Microsoft Windows ファイルであり、Reports Developer をアンインストールしても削除されません。
6. 「Reports Server **パラメータ**」ダイアログ・ボックスに、[2.1.1 項「ステップ 1: Reports Server パラメータの指定」](#)で指定した「Reports Server TNS 名」および「ポート」を入力します。
7. 指定した構成のログが表示されます。「OK」をクリックします。

Oracle Installer により、インストール完了のメッセージが表示されます。

8. 構成ファイルをオープンし、指示に従ってください。

### 2.1.5.2 カスタム・インストール

「カスタム・インストール」は標準インストールよりも複雑で、各製品および各コンポーネント間の関係を十分に理解している必要があります。

カスタム・インストールを選択すると、「Software Asset Manager」ダイアログ・ボックスが表示されます。

「使用可能な製品」に、インストールできる製品がリストされます。製品名の左側にあるプラス記号（+）は、これが、メイン・アプリケーションとそのサポート・ソフトウェアから構成されたソフトウェア・パッケージの名前であることを示します。プラス記号のある行をクリックするとパッケージ全体を選択でき、ダブルクリックするとパッケージの内容が表示されて、中に含まれるソフトウェアを個別に選択することができます。

マシンにすでにインストールされている製品は、「インストール済み製品」にリストされます。この一部は、ソフトウェア・パッケージの可能性があり、前述のとおり機能します。

選択したソフトウェアに必要なディスク領域と、マシンで現在使用できるディスク領域は、製品リストの下「領域要件」フィールドに表示されます。

カスタム・インストールを行うには、「Software Asset Manager」ダイアログ・ボックスで次の手順に従ってください。

1. 「使用可能な製品」リストから、インストールする製品を選択します。  
その他の Windows ベースのアプリケーションと同様に、[Shift] キーを押したまま、リストの一連の製品をクリックして選択することも、[Ctrl] キーを押したまま、任意に複数の製品をクリックして選択することもできます。
2. 「インストール」をクリックします。  
インストールが開始されます。オラクル社は、デフォルトのディレクトリに製品をインストールすることをお勧めします。
3. インストールが完了すると、インストールした製品が「インストール済み製品」ウィンドウにリストされます。
4. Oracle Installer を終了し、システムを再起動します。

「Software Asset Manager」ダイアログ・ボックスには、次のボタンも含まれています。

ボタン	説明
終了	「Software Asset Manager」をクローズして、Oracle Installer を終了します。
オプション ...	次の処理が可能です。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ 製品の削除またはインストールの前に、確認を要求します。</li><li>■ Oracle Installer の機能のさまざまなフェーズで、詳細なメッセージとプロンプトを表示します。</li><li>■ Oracle Installer のアクションをログ・ファイルに記録します。</li></ul>

ボタン	説明
ログを表示 ...	<p>イベント・ログを表示します。イベント・ログには、選択した説明レベルでのインストールと構成イベントが表示されます。「サマリー」、「簡易」および「詳細」ログを保存および取り出し、ファイルに保存できます。</p> <p>デフォルトでは、ログ・ファイルは %ORACLE_HOME%\%ORAINST%\ORAINST.LOG に保存されます。前のインストールで作成されたログ・ファイルがある場合、そのファイルは ORAINST.OLG に改名されます。</p> <p>ログ・ファイルを 3 つ以上 (.LOG および .OLG 以外に) 保管する場合は、上書きされないように .OLG ファイルを改名してください。</p>
アイコンの回復	削除された Oracle 製品のアイコンおよびショート・カットを復元します。
ヘルプ	Oracle Installer のオンライン・ヘルプを表示します。

## 2.2 ランタイム・コンポーネントのインストール

Web 上（または 3 階層環境）で動作する実行環境を構築する場合は、Reports Server コンポーネントもインストールする必要があります。これに関する指示は、『Oracle Reports Developer パブリッシング・レポート リリース 6i』（部品番号 J00618-01）を参照してください。

一方、作成したアプリケーションをクライアント / サーバー環境におけるクライアント・マシンで実行するための手順は次のとおりです。

1. Oracle Installer の起動方法は、[2.1.2 項「ステップ 2: Oracle Installer の起動」](#)と同様です。
2. Oracle Installer により「標準インストール」と「カスタム・インストール」の選択画面が表示されたら、「カスタム・インストール」を選択してください。
3. 「カスタム・インストール」を選択すると、利用可能なコンポーネントが Oracle Installer によりすべて表示されます。**ランタイム・コンポーネント**を選択してください。

Reports Developer のランタイム・コンポーネントをインストールするために、Oracle Installer により **Software Asset Manager** が起動されます。

4. インストールが完了したら Oracle Installer を終了します。
5. Windows をシャットダウンして、再起動します。

## 2.3 Oracle サーバーへの接続

Oracle Server に接続するには、サーバーが存在しているとともに、TNS リスナーが Oracle Server の ORACLE\_HOME から起動され、稼働している必要があります。

この項の作業がすべて終了したら、NEW という接続文字列を使用して Reports Developer からサーバーのローカル・データベース・インスタンスに接続できます。たとえば、scott/tiger@NEW として接続することができます。

### 2.3.1 ステップ 1: サーバーのインストール

Reports Developer で作成したレポートをテストするには、データベースにアクセスする必要があります。アクセスできるデータベースがない場合は、インストールする必要があります。使用しているプラットフォーム用の『インストール・ガイド』を参照して、Oracle8 または Oracle8i をインストールしてください。

**注意:** Oracle8 または Oracle8i は、Windows NT 環境では Reports Developer と物理的に同一のマシン上にインストールできますが、それぞれ別の ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。たとえば、次のように指定します。

ORACLE\_HOME = ora8i  
フル・パス = D:\orant\ora8i

### 2.3.2 ステップ 2: TNS 名の指定

TNS 接続の設定では、Oracle Reports Developer がデータベースに接続するための情報を指定します。情報は tnsnames.ora ファイルに格納され、Oracle Net8 Easy Config を使用して、または手動でテキスト・エディタを使用して更新できます。

作業を進めるには、次のデータベース情報を取得する必要があります。

	インストール時のデフォルト
ホスト名	ora8i.us.oracle.com
データベースのポート番号	Oracle のインストールでは、通常、1521 および 1526 が使用されます。ユーザーの環境ではこれと異なっている可能性もあります。正しいポート番号をデータベース管理者から入手してください。
データベース・システム識別子 (SID)	ORA8I
ユーザー ID/ パスワード	sys/change_on_install system/manager

### 2.3.2.1 Oracle Net8 Easy Config の使用

データベース情報を取得したら、次の手順に従い、tnsnames.ora ファイルにデータベースへの接続情報を入力してください。

1. Oracle Net8 Easy Config を起動するには、「**スタート**」「**プログラム**」「**Oracle for Windows**」「**Oracle Net8 Easy Congfig**」を選択します。
2. 「**新規サービスの追加**」を選択し、「**新規サービス名**」を入力します。「**次へ**」をクリックします。

サービス名は、Reports Developer に接続する場合に、この接続を識別するために使用されます。

3. ユーザーのシステムで使用しているネットワーク・プロトコルを選択し、「**次へ**」をクリックします。
4. 「**ホスト名**」および「**ポート番号**」を入力し、「**次へ**」をクリックします。  
ホスト名は、データベースがあるマシンの IP アドレスまたは名前です。
5. 「**データベース SID**」を入力し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「**サービスのテスト**」をクリックします。「**接続テスト**」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を入力し、「**テスト**」をクリックします。
8. テストが正常に終了したら、「**済み**」をクリックします。

テストが失敗した場合は、「**済み**」をクリックしてから「**戻る**」ボタンを使用し、作成したエントリを再確認してください。変更を加えたら、ステップ7およびステップ8の作業を再び行ってください。

9. 「**次へ**」をクリックしてから「**完了**」をクリックします。

### 2.3.2.2 手動での編集

エントリを手動で作成する手順は、次のとおりです。

1. 次のファイルを探します。

ORACLE\_HOME¥net80¥admin¥tnsnames.ora

ここで ORACLE\_HOME は、製品をインストールしたディレクトリです。

2. 任意のテキスト・エディタでファイルをオープンします。

### 3. 次のエントリを追加します。

```
ServiceName.world  
(DESCRIPTION =  
  (ADDRESS = )  
  (PROTOCOL = )  
  (HOST = hostName)  
  (PORT = portNumber)  
  (CONNECT_DATA = (SID =db_name) )  
)
```

ここで、ServiceName は接続を識別するための別名、hostName はデータベースのあるマシンを識別するためにネットワークで使用される名前、portNumber はデータベースのポート番号、db\_name はシステムの識別子です。

たとえば、HOSTNAME が TEST、SID が ORA8I、TCP/IP のポート番号が 1521、別名が NEW である場合には、次のようなエントリを作成します。

```
NEW.world =  
(DESCRIPTION =  
  (ADDRESS = )  
  (PROTOCOL = TCP)  
  (Host = TEST)  
  (Port = 1521)  
  (CONNECT_DATA = (SID = ORA8I) )  
)
```

**注意:** ホスト名が解決できない場合は、ホストの IP アドレスを指定してください。IP アドレスは、MS-DOS ウィンドウで ping と入力すれば特定できます。

### 4. 変更を保存し、ファイルをクローズします。



---

## アップグレードする場合のインストール

この章では、この製品の以前のリリースをインストールしている環境に Reports Developer リリース 6i をインストールする方法を説明します。

( 以前のリリースでは、製品の名称が Oracle Developer または Developer/2000 であったことに注意してください。 )

ここで取り扱うのは、次の 2 項目です。

- **製品**自体のアップグレード – つまり、新バージョンのインストール。
- 以前作成した**アプリケーション**のアップグレード – つまり、作成済みアプリケーションの新バージョンの製品を使用した再コンパイル。

### 3.1 製品のアップグレード

**警告:** 適切なアップグレード・スクリプトを実行するまで、Oracle Reports Developer データベース表をインストールしたり、作成したりしないでください。製品リソース・ファイル ( .RES ) ( たとえば、fmrjaw.res ) がカスタマイズされている場合は、アップグレードする前にこれらのファイルのバックアップを取っておく必要があります。

- 製品リソース・ファイル ( .RES )
- tnsnames.ora
- sqluct.ora

#### 3.1.1 バージョンに関する問題

##### 3.1.1.1 6.0 より前のバージョンからのアップグレード

現在インストールしているコンポーネントを、すべてアップグレードする必要があります。リリース 1 またはリリース 2 を使用している場合、これは特に重要です。Tools Utilities、GUI Common files および Required Support Files などの基盤となるサポート・ファイルを

アップグレードするため、古いコンポーネントのセットを新しいものと一緒に実行することはできません。

Microsoft Windows 3.x 上で旧バージョンの Reports Developer を使用していた場合、ORACLE\_HOME ディレクトリに相当するディレクトリ名は ORAWIN です。オペレーティング・システムを Windows 95、98 または NT にアップグレードした場合は、ORAWIN ディレクトリが使用されています。

Reports Developer リリース 6i をインストールすると、ORACLE\_HOME ディレクトリが新しく作成されます。この新しいディレクトリには、ORAWIN95 ( Windows 95 )、ORAWIN98 ( Windows 98 ) または ORANT ( Windows NT ) という名前が付けられます。どのような場合にも、以前の ORAWIN ディレクトリが使用または上書きされることはありません。

### 3.1.1.2 リリース 6.0 から 6i へのアップグレード

リリース 6.0 からこの 6i へのアップグレードでは、すべてを再インストールする必要はありません。

## 3.1.2 Oracle Installer の実行

製品の新バージョンを CD-ROM からインストールするには、Oracle Installer を使用します。このツールまたはツールのオプションについてよくわからないことがある場合は、[第 2 章「新規購入の場合のインストール」](#)にある指示に従ってください。

アプリケーションを Web に配布する場合は、Reports Server の新バージョンのインストール、または新バージョンへのアップグレードも行う必要があります。

## 3.1.3 サーバーに関する考慮事項

Reports Developer リリース 6i では、CGI ( Common Gateway Interface ) 形式、サーブレット形式をサポートするリスナーまたは OAS を使用できます。

Reports Developer の CD-ROM で提供している Oracle WebDB Listener を利用するのが手軽な方法ですが、どのような Web サーバーでも使用できます。

現在 Developer リリース 6.0 および Oracle Application Server ( OAS ) リリース 4.0.7 を使用しており、Reports Developer リリース 6i と OAS を継続して使用する場合には、OAS リリース 4.0.8 もインストールする必要があります。次の項目を考慮してください。

- OAS リリース 4.0.8 は、Reports Developer 6i とは別の ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。
- OAS リリース 4.0.8 は、OAS リリース 4.0.7 とは別の ORACLE\_HOME にインストールする必要があります。4.0.7 を上書きしたり、アンインストールしたりしないでください。

OAS リリース 4.0.8 をインストールする場合、カートリッジのアップグレードが必要になることもあります。最新の情報は、Reports Developer のリリース・ノートを参照してください。

## 3.2 ユーザー・アプリケーションのアップグレード

以前に作成したアプリケーション（リリース 6.0 より前のバージョンで作成したアプリケーション）をこの製品の新バージョンで実行する場合、新バージョンのインストール後にこれらのアプリケーションを再コンパイルする必要があります。

アプリケーションをアップグレードするときは、次の点を考慮してください。

- 変換処理を開始する前に、すべてのモジュールのバックアップを作成してください。
- 通常、アプリケーションには上位互換性がありますが、機能に多少の違いが現れることもあります。

詳細は、オンライン・ヘルプの「新機能」および「以前のリリースとの互換性」を参照してください。

リリース間の互換性の詳細は、『Oracle8 移行ガイド』第 6 章を参照してください。

- SQL\*Report または SQL\*Reportmate リリース 1/2/3 で作成したアプリケーションは、直接再コンパイルしてこの 6i 用に変換することはできません。その前に、バージョン 4.0、4.5 または 5.0 を使用して再コンパイルしてください。その中間変換を行った後は、このリリースで再コンパイルできます。
- Reports Developer リリース 6i には、PL/SQL バージョン 1 または 2 をベースとしたモジュールを、このリリースがベースとしているバージョンである PL/SQL バージョン 8 のモジュールに変換するための PL/SQL 変換ユーティリティも付属しています。Oracle Developer 2000 より前のリリースからアップグレードする場合は、すべてのモジュール（Reports、Graphics および PL/SQL ライブラリ）の PL/SQL を新バージョンに変換する必要があります。PL/SQL バージョン 1 またはバージョン 2 を含むレポートをオープンすると、変換ユーティリティが自動的に実行されるため、対話的に変換を行うことができます。変換はバッチ・モードで自動的に実行させることもできます。

PL/SQL 変換ユーティリティの詳細は、『Oracle8 移行ガイド』第 6 章を参照してください。

- ユーザー・イグジットやユーザー作成の DLL を含むアプリケーションをアップグレードする場合、作成したアプリケーションを新規リリースで再コンパイルした後、さらにこれらの DLL ファイルを再コンパイルしなければならない場合があります。

Reports Developer 外部ファンクション・インタフェース（ORA\_FFI パッケージ）を介して 16 ビット DLL をコールするアプリケーションは、Windows 95/98/NT における 16 ビット・コードと 32 ビット・コード実行ファイル間の非互換性により、動作しません。16 ビット DLL は、32 ビット DLL として再コンパイルおよび再リンクする必要があります。

- VBX コントロールを使用するアプリケーションは、Windows の 16 ビット VBX コントロールと 32 ビット実行ファイル間に非互換性があるため、Windows 95/98/NT では正しく動作しません。32 ビット環境では、OCX/ActiveX コントロールが VBX コントロールに相当します。

### 3.2.1 作成したアプリケーションの Web への再配布

以前に作成したアプリケーションをこのリリースを使用して再コンパイルした後は、Web 上に配布できます。

これに関する指示は、『Oracle Reports Developer レポート作成ガイド リリース 6i』（部品番号 J00918-01）を参照してください。

## アンインストール

### 4.1 Reports Developer 製品の削除

Reports Developer をシステムから削除する必要がある場合、アンインストール作業には **Oracle Installer** を使用してください。

Oracle Installer は、Oracle 製品のインストールおよびアンインストールのために特別に設計されたものです。アンインストール時には、コンポーネントおよび関連項目をすべて削除することが重要です。その作業は、Oracle Installer により自動的に行われます。

**注意:** 標準的な Windows アプリケーションを使用してデスクトップを制御していない場合 (たとえば Central Point PC Tools または Norton Desktop を使用している場合) Oracle Installer ではプログラム項目が正しく削除されないことがあります。

何らかの理由により Oracle Installer を使用してアンインストールできない場合は、Reports Developer のインストール時に生成されたサービスに関連するレジストリ・エントリのすべて、および ORACLE\_HOME と ORACLE レジストリ・キーを削除する必要があります。(この作業には、Windows で提供されているレジストリ・エディタを使用できます。)

#### 4.1.1 サービスの停止

Reports Developer を Windows NT で実行している場合は、アンインストールで影響を受ける可能性のあるサービスをすべて停止する必要があります。

1. マシン上で実行している Oracle アプリケーションを、すべてクローズします。
2. 「スタート」 「設定」 「コントロールパネル」 「サービス」を選択し、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
3. Oracle Reports Server (サーバー名) を選択し、「**停止**」をクリックします。  
**注意:** Oracle Reports Server は、複数存在する場合もあります。
4. Oracle WebDB Listener を選択し、「**停止**」をクリックします。

**警告:** 同様のサービスをインストール時に作成した場合は、それらのサービスも停止する必要があります。

## 4.1.2 Reports Developer の削除

Reports Developer をシステムから削除する手順は、次のとおりです。

1. Oracle 製品メディアから Oracle Installer を起動するか、または「**スタート**」「**プログラム**」「**Oracle for Windows**」「**Oracle Installer**」を選択します。  
Oracle Installer の起動の詳細は、第 2 章を参照してください。
2. 「インストール・オプション」ダイアログで、「**カスタム**」を選択します。
3. システムから削除する製品を、「インストール済み製品」リスト・ボックスから選択します。
4. 「**削除**」をクリックします。製品のアンインストールが他の製品に影響を及ぼす場合、アンインストールの前に Oracle Installer により確認プロンプトが表示されます。
5. Reports Developer を削除した後に再インストールする場合、インストール前にマシンを再起動してください。

## アプリケーションを格納する表の設定

ユーザーまたはデータベース管理者は、データベース表を作成して Oracle Server にアプリケーション・モジュールを保存できます。

Report Builder およびほとんどの Builder では、このステップはオプションです。サーバーにアプリケーションを保存する必要はありません。ただし、Schema Builder ではこれらのデータベース表が必要になります。

オプションが用意されていても、ほとんどの場合、作成したアプリケーションをサーバーに格納する必要はなく、このステップは省略できます。アプリケーションをサーバーに格納するのは、通常、1 箇所で集中的に管理および制御を行うためです。

この章で扱う項目は、次のとおりです。

- データベース表の作成
- データベース表の適切な使用方法
- ユーザー・アクセス権限の付与と取消し
- データベース表の削除
- データベース表のアップグレード

データベース表を作成するには、管理者権限が必要となることもあります。このような権限が必要になった場合は、データベース管理者に相談してください。

### 5.1 データベース表の作成

**注意:** 次の説明は、新規インストールにのみ適用されます。Oracle Developer 製品の旧バージョン用のデータベース表がすでに作成されている場合、既存の表を削除したり、Reports Developer の現行バージョン用のデータベース表を作成したりすると、データベースに格納されている既存の Oracle Developer モジュールがすべて破壊されることに注意してください。既存データベース表のアップグレード手順については、[5.5 項「データベース表のアップグレード」](#)(5-35 ページ)を参照してください。

Reports Developer で作成したアプリケーション・モジュールは、ファイルとして保存することも、サーバーに保存することもできます。モジュールをサーバーに保存すると、クライアント・マシンのディスク領域を節約しモジュールへの共有アクセスが実現されますが、サーバーに格納されたモジュールへのアクセスは、ファイルとしてクライアント・マシンに格納されている場合より遅くなることがあります。モジュールの格納先を決定するときは、次の情報を考慮してください。

格納場所	どのようなときに使用するか
データベース・サーバー	オペレーティング・システムによって提供されていないセキュリティを必要とする場合  アプリケーションをクライアント・マシンに格納したくてもディスク領域が十分でない場合  他のユーザーとアプリケーションを共有したい場合  モジュール・アクセスの速度が上記の考慮事項ほど重要ではない場合
ファイル・システム	上記の基準が該当しないか重要ではない場合

ユーザーがモジュールをサーバーに保存できるようにするには、システム管理者がこのモジュールを格納するための表を作成し、この表を使用するユーザーにアクセス権限を付与しておく必要があります。

5.1.1 ステップ 1: Oracle Installer による SQL スクリプトのインストール

標準インストールでは、SQL スクリプトはインストールされません。インストールしていない場合は、Oracle Installer を使用してインストールします。SQL スクリプトは、Reports Developer のデータベース表の作成および管理に必要です。

SQL スクリプトをインストールする手順は、次のとおりです。

- 1. Oracle Installer を起動し、「Reports Developer インストール・オプション」ダイアログ・ボックスで「カスタム・インストール」を選択します。( Oracle Installer の詳細は、第 1 章を参照してください)。
- 2. 「使用可能な製品」リストから「Reports Developer Database Tables」を選択します。
- 3. 「インストール」をクリックします。

これらのスクリプトをインストールすると、「Oracle Reports 6i Admin」という「スタート」メニュー項目、およびそれに関連するサブメニュー項目の「Admin Build」、「Admin Drop」、「Admin Grant」、「Admin Revoke」が作成されます。これらのメニュー項目を選択すると、データベース管理作業を行うために 1 つ以上のスクリプトが実行されます。

5.1.2 ステップ 2: Oracle Developer のデータベース表の作成

Oracle Developer のデータベース表を作成するには、次のようにします。



1. 「スタート」「プログラム」「Oracle Reports 6i Admin」「Admin Build」をクリックします。

このメニュー項目では、次の SQL スクリプトが実行されます。

```
%ORACLE_HOME%\TOOLS\B60\DEVBUILD.SQL
```

2. パスワードを入力します。システムに新規インストールした場合、パスワードは manager です。
3. データベース接続を入力します。接続は、データベース名に .world を付加したものです。データベース名は、tnsnames.ora ファイルに格納されています。
4. スクリプトの指示に従います。

## 5.2 データベース表の適切な使用方法

Reports Builder およびその他の Builder では、データベース表はモジュールを格納するために使用します。データベース表をそれ以外の目的で使用することは想定されていません。表の構造および構成は、リリースによって異なっている可能性があります。これらの表に SQL 問合せを行って、作成したモジュールに関するレポートやドキュメントを作成することは避けてください。Oracle では、データベース表のこのような使用はサポートされていません。したがって、表の構造と内容についての記載はありません。

データベース・ロールの詳細は、Oracle8 または Oracle 8i のマニュアルを参照してください。

## 5.3 ユーザー・アクセス権限の付与と取消し

Reports Developer のデータベース表を作成したら、それらの表に対するユーザー・アクセス権限を付与する必要があります。あるユーザーのアクセス権限を取り消す必要がある場合は、そのユーザーの権限を削除する必要があります。アクセス権限の付与および取消しの作業は、Oracle Installer から提供される SQL スクリプトを使用して実行します。

### 5.3.1 データベース表に対するアクセス権限の付与

表へのアクセスが必要なユーザーごとに、この作業を実行する必要があります。かわりに、ユーザー PUBLIC にアクセス権限を付与することによって、すべてのユーザーに対して同時にアクセス権限を付与できます。

Reports Developer へのアクセス権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」「プログラム」「Oracle Reports 6i Admin」「Admin Grant」をクリックします。

このメニュー項目では、次の SQL スクリプトが実行されます。

```
%ORACLE_HOME%\TOOLS\B60\DEVGRNT.SQL username
```

2. パスワードを入力します。システムに新規インストールした場合、パスワードは manager です。
3. データベース接続を入力します。接続は、データベース名に .world を付加したものです。データベース名は、tnsnames.ora ファイルに格納されています。
4. 表へのアクセス権限を付与するユーザーのユーザー名を入力します。  
すべてのユーザーにアクセス権限を付与するには PUBLIC と入力し、ステップ 5 の作業はスキップします。
5. アクセス権限を付与するユーザーごとに、ステップ 1 と 2 の作業を繰り返します。

### 5.3.2 データベース表に対するアクセス権限の取消し

表へのアクセス権限を取り消すユーザーごとに、この作業を実行する必要があります。別の方法として、ユーザー PUBLIC のアクセス権限を取り消すことで、すべてのユーザーのアクセス権限を同時に取り消すこともできます。

Reports Developer へのアクセス権限を取り消す手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」「プログラム」「Oracle Reports 6i Admin」「Admin Revoke」をクリックします。

このメニュー項目では、次の SQL スクリプトが実行されます。

```
%ORACLE_HOME%\%TOOLS%\DBTAB60\DEVVRVKE.SQL username
```

2. パスワードを入力します。システムに新規インストールした場合、パスワードは manager です。
3. データベース接続を入力します。接続は、データベース名に .world を付加したものです。データベース名は、tnsnames.ora ファイルに格納されています。
4. アクセス権限を取り消すユーザーのユーザー名を入力します。  
すべてのユーザーのアクセス権限を取り消すには PUBLIC と入力し、ステップ 5 の作業はスキップします。
5. アクセス権限を取り消すユーザーごとに、ステップ 1 と 2 の作業を繰り返します。

## 5.4 データベース表の削除

**注意:** データベース表を削除すると、表に格納されているモジュールはすべて消去されます。削除する表に格納されているモジュールが不要であることを確認するまでは、表を**削除しないでください**。データベースに格納されているモジュールのバックアップ方法の詳細は、[5.5.1 項](#)を参照してください。

Reports Developer のデータベース表を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」「プログラム」「Oracle Reports 6i Admin」「Admin Drop」をクリックします。

このメニュー項目では、次の SQL スクリプトが実行されます。

```
%ORACLE_HOME%\TOOLS\DEVTAB60\DEVDRP.SQL
```

2. パスワードを入力します。システムに新規インストールした場合、パスワードは manager です。
3. データベース接続を入力します。接続は、データベース名に .world を付加したものです。データベース名は、tnsnames.ora ファイルに格納されています。
4. スクリプトの指示に従います。

## 5.5 データベース表のアップグレード

Oracle Reports Developer リリース 1 からリリース 6i にアップグレードする場合、アップグレードする必要がある表は Translation Builder の表のみです。その他の Builder (Form Builder、Graphics Builder、Procedure Builder、Query Builder、Schema Builder) 用の表および通常の表をアップグレードする必要はありません。

1 つ以上のアップグレード・スクリプトを利用すると、表をゼロから作成することなくアップグレードできます。アップグレードすると、既存の表の管理情報も更新されます。

### 5.5.1 ステップ 1: データベースの内容のバックアップ

データベース表のアップグレード後も使用するモジュールがデータベース内に格納されている場合は、これらのモジュールのバックアップを取る必要があります。**バックアップを取らなかったモジュールは、すべて失われます。**

既存のモジュールのバックアップを取る前に、現在データベースに格納されている使用可能なすべてのモジュールのリストを作成しておくとう便利です。リストを作成するには、データベースにログオンして次の SQL スクリプトを実行します。

```
column product format a15
column modtype format a15
SELECT product, modtype, owner, modname
FROM tool_module
ORDER BY product, modtype, owner;
```

各アプリケーション・モジュールのソース・ファイルは、次に示すファイル拡張子によって識別できます。

表 5-1 アプリケーション・モジュールの拡張子

アプリケーション・モジュール	拡張子
Form Builder	.FMB/.MMB/.PLL
Report Builder	.RDF/.SQL
Graphics Builder	.OGD
Procedure Builder	.PLL
Query Builder	.BRW/.SQL

5.5.1.1 モジュールのバックアップ

モジュールをバックアップする手順は、次のとおりです。

- 1. 適切な Builder でモジュールをオープンします。
- 2. 「ファイル」「名前を付けて保存」コマンドを使用して、モジュールをオペレーティング・システム・ファイルとして保存します。

5.5.1.2 ステップ 2: 表のアップグレード

データベースのバックアップを作成したら、Translation Builder のデータベース表をアップグレードできます。

注意: すべての SQL スクリプトは、SYSTEM アカウントのもとで実行してください。

次のスクリプトを実行して、既存の表をアップグレードします。

```
%ORACLE_HOME%\%TOOLS%\DBTAB60\OTM60\SQLMIG.SQL
```

5.5.1.3 ステップ 3: データベースの内容の復元

データベース表のアップグレードを完了した後、モジュールをデータベースに復元できます。

モジュールを復元する手順は、次のとおりです。

- 1. 適切な Builder でモジュールをオープンします。
- 2. 「ファイル」「名前を付けて保存」コマンドを使用して、モジュールをデータベース・モジュールとして保存します。

#### 5.5.1.4 ステップ 4: ユーザー・アクセス権限の付与

旧バージョンからのアップグレードが完了したら、データベース表へのユーザー・アクセス権限を付与し直す必要があります。この方法は、[5.3 項](#)を参照してください。



---

## インストール後の作業

ここまでで、Reports Developer 製品のインストールは完了です。ここでは、インストール後の作業の流れについて説明します。

### 6.1 Reports Developer アプリケーションを初めて開発する場合

この製品の機能に習熟し、Reports アプリケーションの作成方法を習得してください。

まず、Quick Tour を使用することをお薦めします。Quick Tour は製品の CD-ROM に含まれており、すでにインストールが完了して使用可能になっているはずです。Quick Tour にアクセスするには、Report Builder を起動して「ようこそ」画面で「Quick Tour を実行」オプションを選択します。Quick Tour は、すべての Builder の「ヘルプ」メニューからも起動できます。

Quick Tour を修了したら、マニュアルおよびオンライン・ヘルプのトピックにある詳細な解説を読み進めてください。

この製品のユーザー向けに、補足的な情報が公開されることもあります。この情報（たとえばホワイト・ペーパー）には、Oracle Reports Developer Web サイト  
(<http://www.oracle.com/tools/developer/> および  
<http://technet.oracle.com/products/reports/> および <http://www.oracle.co.jp/developer/>)  
でアクセスしてください。

### 6.2 Reports Developer アプリケーションの開発に慣れている場合

オンライン・ヘルプの「新機能の説明」および Report Builder のヘルプ・トピックを参照してください。この項目には、このリリースの新機能の要約があります。「新機能の説明」は、Quick Tour の「機能と利点」にもあります。

オンライン・ヘルプの「以前のバージョンとの互換性」も参照してください。この項目には、変更のあった動作の概要が示されています。

特定の新機能または動作の詳細は、ヘルプ・トピックまたはマニュアルの特定の項、あるいはその両方を参照してください。

このリリースには、新しく作成された『Oracle Reports Developer レポート作成ガイド リリース 6i』( 部品番号 : J00918-01 ) というマニュアルが付属しています。このマニュアルは、Web 配布による利点および配布の実現方法を理解するときに役立ちます。

<http://www.oracle.com/tools/developer/> と <http://www.oracle.co.jp/developer/> にある Oracle Developer Web サイト、および <http://technet.oracle.com/products/reports/> にある Oracle Reports Web サイトも定期的にチェックすると役立ちます。ここでは、有用な補足情報が公開されています。



# 第 II 部

---

付録



---

## Oracle Express

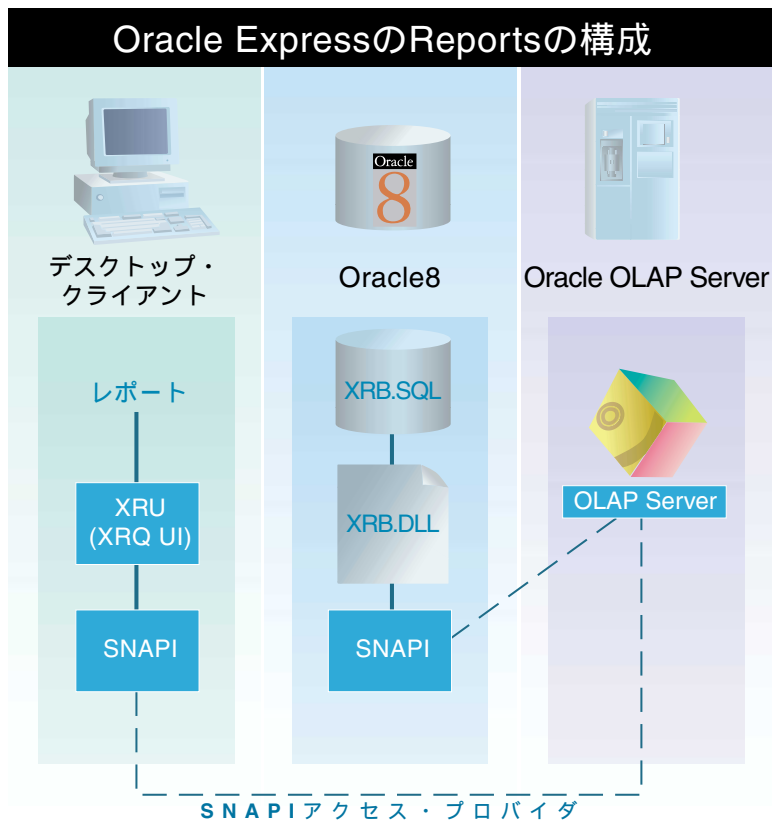
この付録では、Oracle Express を Oracle Reports と統合する際に役立つ情報を記載します。主に次の作業について説明します。

- Oracle Express を使用するための Oracle Reports の構成
- バッファ・サイズの指定
- キャラクタ・セットの指定
- 数値範囲の指定

### A.1 Oracle Express を使用するための Reports の構成

Oracle Express データを使用するレポートを作成するには、次のようにシステムを構成する必要があります。

- サーバーで、必要な PL/SQL パッケージと Oracle8 Server をインストールします。
- クライアント上で Reports Express Support コンポーネントおよび Oracle Express Connection Editor をインストールします。



システム要件：

- Windows 95/98/NT
- OLAP Server リリース 6.2 以降
- Oracle8 リリース 8.0.6
- Reports リリース 6i

**注意：** 個々の製品の要件は、使用しているプラットフォームの Oracle OLAP Server および Oracle8 のインストール情報を参照してください。

#### 使用上の注意

- Express Administrator で構成した Express データベースのみ使用してください。  
Express Administrator を使用するデータベースの構成については、『データベース管理者ガイド』を参照してください。

- Reports からは、パスワードが必要な Express データベース・ファイル (.DB) にはアクセスできません。
- Personal Express は、このリリースの Reports ではサポートしていません。

### A.1.1 クライアント側の構成

1. Oracle Reports 製品が含まれている CD を挿入します。CD-ROM ドライブに自動実行機能がサポートされている場合は、Oracle Installer が自動的に起動します。それ以外の場合は、次のステップを実行してください。
  - a. アクティブな Windows アプリケーションをすべて停止します。
  - b. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」ダイアログ・ボックスをオープンします。
  - c. 「ファイル名を指定して実行」ダイアログで次のように入力します (X: は実際の CD-ROM ドライブの文字に置き換えてください)。

X:¥SETUP.EXE

- d. 「OK」をクリックして、Oracle Installer を起動します。
2. Oracle Installer の「インストール・オプション」ダイアログが表示されたら、「カスタム・インストールおよび削除」を選択し、「OK」をクリックします。
3. 「使用可能な製品」のリストから Reports Express Support および Oracle Express Connection Editor を選択します。

**ヒント:** 複数の項目を選択する場合は [Ctrl] キーを押しながらクリックします。

4. 「インストール」をクリックします。

**注意:** OLAP Server への接続をまだ設定していない場合は、Oracle Express Connection Editor を使用して設定できます。

### A.1.2 サーバー側の構成

サーバー側の構成では、次の 4 つの作業を行います。

- Oracle8 Server リリース 8.0.6 のインストール
- Express External Oracle8 Procedures のインストール
- Oracle8 Server における Express Support 管理者アカウントの作成
- Express Support スキーマ・オブジェクトにおけるユーザー・アカウントの準備

#### A.1.2.1 Oracle8 Server リリース 8.0.6 のインストール

使用しているプラットフォームの Oracle8 インストール・ガイドを参照してください。

### A.1.2.2 Express External Oracle8 Procedures のインストール

1. Oracle Reports 製品が含まれている CD を挿入します。CD-ROM ドライブに自動実行機能がサポートされている場合は、Oracle Installer が自動的に起動します。それ以外の場合は、次のステップを実行してください。
  - a. アクティブな Windows アプリケーションをすべて停止します。
  - b. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」ダイアログ・ボックスをオープンします。
  - c. 「ファイル名を指定して実行」ダイアログで次のように入力します (X: は実際の CD-ROM ドライブのドライブ文字に置き換えてください)。
 

```
X:¥SETUP.EXE
```
  - d. 「OK」をクリックして、Oracle Installer を起動します。
2. Oracle Installer の「インストール・オプション」ダイアログが表示されたら、「**カスタム・インストールおよび削除**」を選択し、「OK」をクリックします。
3. 「使用可能な製品」リストで、「Reports Express Support」というノードのプラス記号 (+) をクリックしてノードを展開し、リストから「**Express External Oracle8 Procedures**」を選択します。
4. 「インストール」をクリックします。

### A.1.2.3 Oracle8 Server における Express Support 管理者アカウントの作成

必要な Express Support 管理者アカウントは、各 Oracle8 インスタンスで 1 つのみです。アカウントと必要なスキーマ・オブジェクトがすでに存在している場合は、ステップを省略して [A.1.2.4 項「Express Support スキーマ・オブジェクトにおけるユーザー・アカウントの準備」](#)に進んでください。

1. SQL\*Plus に SYSTEM ユーザーとしてログインし、管理者アカウントを作成して CREATE LIBRARY 権限、CREATE PUBLIC SYNONYM 権限および CREATE SEQUENCE 権限を付与します。たとえば、管理者アカウントが expadmin の場合、必要な権限を付与するには次のコマンドを実行します。

```
SQL> create user expadmin identified by expadmin default tablespace
user_data temporary tablespace temporary_data quota unlimited on user_data
quota unlimited on temporary_data;
SQL> grant connect,resource to exadmin;
SQL> grant create library, create public synonym, create sequence to
expadmin;
```

2. SQL\*Plus に管理者 (例: expadmin) としてログインし、管理者のスキーマ・オブジェクトをインストールする SQL スクリプトを実行します。

```
SQL> @ ORACLE_HOME¥olap¥xrb60¥xrb_admin.sql;
```

### A.1.2.4 Express Support スキーマ・オブジェクトにおけるユーザー・アカウントの準備

Express Support を使用するスキーマ用として、Express Support スキーマ・オブジェクトを作成する必要があります。別のスキーマで作成した既存の Express Support スキーマ・オブジェクトは使用できません。

**注意:** ユーザー・アカウントを持っていない場合は、このステップの作業を開始する前にアカウントを作成しておく必要があります。

1. SQL\*Plus に SYSTEM ユーザーとしてログインし、ユーザー・アカウントに CREATE TYPE 権限および CREATE PROCEDURE 権限を付与します。たとえば、ユーザー・アカウントが `expuser` である場合、必要な権限を付与するには次のコマンドを実行します。

```
SQL> grant create type, create procedure to expuser;
```

2. SQL\*Plus に `expuser` としてログインし、SQL スクリプトを実行して Express Support スキーマ・オブジェクトをインストールします。

```
SQL> @ ORACLE_HOME\olap\%username%\user.sql;
```

### A.1.2.5 ランタイム・パラメータの要件

Web などで行うために、Oracle Reports Server で作成したレポートを Express に配布する場合は、`userid`、`server`、`desformat` などのパラメータを指定するとともに、次のランタイム・パラメータも必要になります。

```
express_server="server=ncacn_ip_tcp:my_express_server/si=1/st=1/ct=0/sv=1/"
```

ここで、`my_express_server` は Oracle OLAP Server を実行しているサーバーのホスト名です。

## A.2 Express データのバッファ・サイズ

### A.2.1 デフォルトのバッファ・サイズ

ユーザーが Express データを含むレポートを作成すると、データは Express からフェッチされ、メモリー・バッファに格納されてから、表示されます。通常、ほとんどの環境ではデフォルトのバッファ・サイズで十分です。バッファのデフォルト・サイズは、おそらく許容範囲であるため変更する必要はありません。

#### バッファ・サイズの指定が必要な場合

バッファに、デフォルトで指定されている値よりも大きいサイズか小さいサイズを指定できます。たとえば、ユーザーが小さいレポートをいくつも生成する場合は、バッファ・サイズを減らします。ユーザーが非常に大きいレポートを生成する場合は、サイズを増やす必要があります。

バッファのデフォルト・サイズは、`xrb.ini` ファイルで変更します。このファイルは Oracle8 Server にあり、多くのユーザーで共有している点に注意してください。サーバーは Express からデータをフェッチしている間はそのサーバーのすべてのユーザーに同じサイズのバッファを割り当てます。Express データに同時にアクセスしている多くのユーザーのニーズに合うようサイズを指定するときに使用します。サイズはユーザーがレポートのデータをフェッチできるように十分大きく、同時にサーバーにも十分なメモリがあるようにします。

## A.2.2 バッファ・サイズ

次のリストではバッファ・サイズをいくつか説明します。

- 64KB: これは許容範囲で最小のバッファ・サイズです。これ以下のバッファ・サイズを指定しても、バッファは 64KB になります。
- 2MB: これはデフォルトのバッファ・サイズです。別のサイズを指定しなければ、バッファ・サイズは 2MB になります。
- 50MB: これは許容範囲で最大のバッファ・サイズです。これより大きいバッファ・サイズを指定しても、バッファ・サイズは 50MB になります。このように大きいバッファ・サイズを指定する場合、Oracle8 に十分なメモリがあることを確認してください。

## A.2.3 バッファ・サイズの指定

バッファ・サイズを指定するには、設定が有効になるように `xrb.ini` ファイルを作成または変更します。次の手順ではファイルの仕様を作成する方法について説明します。

1. Oracle8 を実行しているコンピュータで、`ORACLE_HOME\BIN` ディレクトリの `xrb.ini` というファイルを探します。ファイルが見つかったら、ステップ 3 に進んでください。ファイルがない場合はステップ 2 に進みます。
2. テキスト・エディタで、`ORACLE_HOME\BIN` ディレクトリに `xrb.ini` というファイルを作成します。
3. テキスト・エディタで、ファイルの [Options] セクションへスクロールします。ない場合はこのセクション・ラベルを作成します。
4. FetchAlloc 設定がある場合はその値を編集します。ない場合は、設定を作成します。100000 または 6000000 などの整数値を入力します。
5. 変更を保存しファイルをクローズします。

## A.2.4 バッファ・サイズの設定例

次の例では、バッファ・サイズを 4MB に設定しています。

```
[Options]
FetchAlloc = 4000000
```



## A.3 シングルバイト・キャラクタ・セット

### A.3.1 Oracle Express からのキャラクタ・セットの指定

Oracle Express のデフォルトのシングルバイト・キャラクタ・セットを変更した場合は、Oracle Reports が Oracle Express データベースのデータを正確に処理できるよう、Oracle Reports Developer の `xrb.ini` ファイルを作成または修正する必要があります。この `xrb.ini` ファイルは、データベースで使用するキャラクタ・セットについての情報を指定するために使用します。次の手順ではファイルの仕様を作成する方法について説明します。

1. Oracle8 を実行中のマシン上で、ORACLE\_HOME¥BIN ディレクトリの `xrb.ini` というファイルを探します。ファイルが見つかったら、ステップ 3 に進んでください。ファイルがない場合はステップ 2 に進みます。
2. テキスト・エディタで、ORACLE\_HOME¥BIN ディレクトリに `xrb.ini` というファイルを作成します。
3. テキスト・エディタで、ファイルの [XPCharSet] セクションへスクロールします。ない場合はこのセクション・ラベルを作成します。
4. XPCharSet 設定がある場合はその値を編集します。ない場合は、設定を作成します。次の書式で値を設定します。

```
language_territory.charset
language、territory、charset には、次の表の値が入ります。
```

5. 変更を保存しファイルをクローズします。

### A.3.2 キャラクタ・セットの設定例

次に示すのは、キャラクタ・セットの設定例です。

```
[XPCharSet]
XPCharSet = AMERICAN_AMERICA.US8PC437
```

### A.3.3 言語

次の表に、XPCharSet 設定で `language` に入力する値の一覧を示します。値が複数の語からなる場合は、次の例で示すように各語の間にスペースを入れます。

```
[XPCharSet]
XPCharSet = BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8PC850
```

言語
AMERICAN
ARABIC

---

**言語**

---

BENGALI

BRAZILIAN PORTUGUESE

BULGARIAN

CANADIAN FRENCH

CATALAN

CROATION

CZECH

DANISH

DUTCH

EGYPTIAN

ENGLISH

ESTONIAN

FINNISH

FRENCH

GERMAN DIN

GERMAN

GREEK

HEBREW

HUNGARIAN

ICELANDIC

ITALIAN

JAPANESE

KOREAN

LATIN AMERICAN SPANISH

LATVIAN

LITHUANIAN

MALAY

MEXICAN SPANISH

NORWEGIAN

言語
POLISH
PORTUGUESE
ROMANIAN
RUSSIAN
SIMPLIFIED CHINESE
SLOVAK
SLOVENIAN
SPANISH
SWEDISH
THAI
TRADITIONAL CHINESE
TURKISH
UKRAINIAN
VIETNAMESE

### A.3.4 地域

次の表に、XPCharSet 設定で `territory` に入力する値の一覧を示します。

地域
ALGERIA
AMERICA
AUSTRIA
BAHRAIN
BANGLADESH
BRAZIL
BULGARIA
CANADA
CATALONIA
CHINA

---

**地域**

---

CIS

CROATIA

CZECH REPUBLIC

CZECHOSLOVAKIA

DENMARK

DJIBOUTI

EGYPT

ESTONIA

FINLAND

FRANCE

GERMANY

GREECE

HONG KONG

HUNGARY

ICELAND

IRAQ

ISRAEL

ITALY

JAPAN

JORDAN

KOREA

KUWAIT

LATVIA

LEBANON

LIBYA

LITHUANIA

MALAYSIA

MAURITANIA

MEXICO

---

**地域**

---

MOROCCO

NORWAY

OMAN

POLAND

PORTUGAL

QATAR

ROMANIA

SAUDI ARABIA

SLOVAKIA

SLOVENIA

SOMALIA

SPAIN

SUDAN

SWEDEN

SWITZERLAND

SYRIA

TAIWAN

THAILAND

THE NETHERLANDS

TUNISIA

TURKEY

UKRAINE

UNITED ARAB EMIRATES

UNITED KINGDOM

VIETNAM

YEMEN

---

A.3.5 格納キャラクタ・セット

次の表に、XPCharSet 設定で `charset` に入力する値の一覧を示します。値は名称の列に記載します。

ID	名称	説明
1	US7ASCII	ASCII 7-bit American
2	WE8DEC	DEC 8-bit West European
3	WE8HP	HP LaserJet 8-bit West European
4	US8PC437	IBM-PC Code Page 437 8-bit American
5	WE8EBCDIC37	EDCDIC Code Page 37 8-bit West European
6	WE8EBCDIC500	EDCDIC Code Page 500 8-bit West European
8	WE8EBCDIC285	EDCDIC Code Page 285 8-bit West European
10	WE8PC850	IBM-PC Code Page 850 8-bit West European
11	D7DEC	DEC VT100 7-bit German
12	F7DEC	DEC VT100 7-bit French
13	S7DEC	DEC VT100 7-bit Swedish
14	E7DEC	DEC VT100 7-bit Spanish
15	SF7ASCII	ASCII 7-bit Finnish
16	NDK7DEC	DEC VT100 7-bit Norwegian/Danish
17	I7DEC	DEC VT100 7-bit Italian
18	NL7DEC	DEC VT100 7-bit Dutch
19	CH7DEC	DEC VT100 7-bit Swiss (German/French)
20	YUG7ASCII	ASCII 7-bit Yugoslavian
21	SF7DEC	DEC VT100 7-bit Finnish
22	TR7DEC	DEC VT100 7-bit Turkish
23	IW7IS960	Israeli Standard 960 7-bit Latin/Hebrew
25	IN8ISCII	Multiple-Script Indian Standard 8-bit Latin/Indian Languages
31	WE8ISO8859P1	ISO 8859-1 West European
32	EE8ISO8859P2	ISO 8859-2 East European
33	SE8ISO8859P3	ISO 8859-3 South European

ID	名称	説明
34	NEE8ISO8859P4	ISO 8859-4 North and North-East European
35	CL8ISO8859P5	ISO 8859-5 Latin/Cyrillic
36	AR8ISO8859P6	ISO 8859-6 Latin/Arabic
37	EL8ISO8859P7	ISO 8859-7 Latin/Greek
38	IW8ISO8859P8	ISO 8859-8 Latin/Hebrew
39	WE8ISO8859P9	ISO 8859-9 West European & Turkish
40	NE8ISO8859P10	ISO 8859-10 North European
41	TH8TISASCII	Thai Industrial Standard 620-2533 - ASCII 8-bit
42	TH8TISEBCDIC	Thai Industrial Standard 620-2533 - EBCDIC 8-bit
43	BN8BSCII	Bangladesh National Code 8-bit BSCII
44	VN8VN3	VN3 8-bit Vietnamese
50	WE8NEXTSTEP	NeXTSTEP PostScript 8-bit West European
70	AR8EBCDICX	EBCDIC XBASIC Server 8-bit Latin/Arabic
81	EL8DEC	DEC 8-bit Latin/Greek
82	TR8DEC	DEC 8-bit Turkish
90	WE8EBCDIC37C	EBCDIC Code Page 37 8-bit Oracle/c
91	WE8EBCDIC500C	EBCDIC Code Page 500 8-bit Oracle/c
92	IW8EBCDIC424	EBCDIC Code Page 424 8-bit Latin/Hebrew
93	TR8EBCDIC1026	EBCDIC Code Page 1026 8-bit Turkish
94	WE8EBCDIC871	EBCDIC Code Page 871 8-bit Icelandic
95	WE8EBCDIC284	EBCDIC Code Page 284 8-bit Latin American/Spanish
110	EEC8EUROASCII	EEC Targon 35 ASCII West European/Greek
113	EEC8EUROPA3	EEC EUROPA3 8-bit West European/Greek
114	LA8PASSPORT	German Government Printer 8-bit All-European Latin
140	BG8PC437S	IBM PC Code Page 437 8-bit (Bulgarian Modification)
150	EE8PC852	IBM PC Code Page 852 8-bit East European
152	RU8PC866	IBM PC Code Page 866 8-bit Latin/Cyrillic
153	RU8BESTA	BESTA 8-bit Latin/Cyrillic
154	IW8PC1507	IBM PC Code Page 1507/862 8-bit Latin/Hebrew

ID	名称	説明
155	RU8PC855	IBM PC Code Page 855 8-bit Latin/Cyrillic
156	TR8PC857	IBM PC Code Page 857 8-bit Turkish
158	CL8MACCYRILLIC	Mac Client 8-bit Latin/Cyrillic
159	CL8MACCYRILLICS	Mac Server 8-bit Latin/Cyrillic
160	WE8PC860	IBM PC Code Page 860 8-bit West European
161	IS8PC861	IBM PC Code Page 861 8-bit Icelandic
162	EE8MACCES	Mac Server 8-bit Central European
163	EE8MACCROATIANS	Mac Server 8-bit Croatian
164	TR8MACTURKISHS	Mac Server 8-bit Turkish
165	IS8MACICELANDICS	Mac Server 8-bit Icelandic
166	EL8MACGREEKS	Mac Server 8-bit Greek
167	IW8MACHEBREWS	Mac Server 8-bit Hebrew
170	EE8MSWIN1250	MS Windows Code Page 1250 8-bit East European
171	CL8MSWIN1251	MS Windows Code Page 1251 8-bit Latin/Cyrillic
172	ET8MSWIN923	MS Windows Code Page 923 8-bit Estonian
173	BG8MSWIN	MS Windows 8-bit Bulgarian Cyrillic
174	EL8MSWIN1253	MS Windows Code Page 1253 8-bit Latin/Greek
175	IW8MSWIN1255	MS Windows Code Page 1255 8-bit Latin/Hebrew
176	LT8MSWIN921	MS Windows Code Page 921 8-bit Lithuanian
177	TR8MSWIN1254	MS Windows Code Page 1254 8-bit Turkish
178	WE8MSWIN1252	MS Windows Code Page 1252 8-bit West European
179	BLT8MSWIN1257	MS Windows Code Page 1257 8-bit Baltic
180	D8EBCDIC273	EBCDIC Code Page 273/1 8-bit Austrian German
181	I8EBCDIC280	EBCDIC Code Page 280/1 8-bit Italian
182	DK8EBCDIC277	EBCDIC Code Page 277/1 8-bit Danish
183	S8EBCDIC278	EBCDIC Code Page 278/1 8-bit Swedish
184	EE8EBCDIC870	EBCDIC Code Page 870 8-bit East European
185	CL8EBCDIC1025	EBCDIC Code Page 1025 8-bit Cyrillic
186	F8EBCDIC297	EBCDIC Code Page 297 8-bit French



ID	名称	説明
187	IW8EBCDIC1086	EBCDIC Code Page 1086 8-bit Hebrew
188	CL8EBCDIC1025X	EBCDIC Code Page 1025 (Modified) 8-bit Cyrillic
190	N8PC865	IBM-PC Code Page 865 8-bit Norwegian
191	BLT8CP921	Latvian Standard LVS8-92(1) Windows/Unix 8-bit Baltic
192	LV8PC1117	IBM-PC Code Page 1117 8-bit Latvian
193	LV8PC8LR	Latvian Version IBM-PC Code Page 866 8-bit Latin/Cyrillic
194	BLT8EBCDIC1112	EBCDIC Code Page 1112 8-bit Baltic Multilingual
195	LV8RST104090	IBM-PC Alternative Code Page 8-bit Latvian (Latin/Cyrillic)
196	CL8KOI8R	RELCOM Internet Standard 8-bit Latin/Cyrillic
197	BLT8PC775	IBM-PC code Page 775 8-bit Baltic
201	F7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit French
202	E7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit Spanish
203	S7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit Swedish
204	DK7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit Danish
205	N7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit Norwegian
206	I7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit Italian
207	D7SIEMENS9780X	Siemens 97801/97808 7-bit German
210	WE8GCOS7	Bull EBCDIC GCOS7 8-bit West European
211	EL8GCOS7	Bull EBCDIC GCOS7 8-bit Greek
221	US8BS2000	Siemens 9750-62 EBCDIC 8-bit American
222	D8BS2000	Siemens 9750-62 EBCDIC 8-bit German
223	F8BS2000	Siemens 9750-62 EBCDIC 8-bit French
224	E8BS2000	Siemens 9750-62 EBCDIC 8-bit Spanish
225	DK8BS2000	Siemens 9750-62 EBCDIC 8-bit Danish
231	WE8BS2000	Siemens EBCDIC.DF.04 8-bit West European
235	CL8BS2000	Siemens EBCDIC.EHC.LC 8-bit Cyrillic
239	WE8BS2000L5	Siemens EBCDIC.DF.04.L5 8-bit West European/Turkish
241	WE8DG	DG 8-bit West European
251	WE8NCR4970	NCR 4970 8-bit West European

ID	名称	説明
261	WE8ROMAN8	HP Roman8 8-bit West European
262	EE8MACCE	Mac Client 8-bit Central European
263	EE8MACCROATIAN	Mac Client 8-bit Croatian
264	TR8MACTURKISH	Mac Client 8-bit Turkish
265	IS8MACICELANDIC	Mac Client 8-bit Icelandic
266	EL8MACGREEK	Mac Client 8-bit Greek
267	IW8MACHEBREW	Mac Client 8-bit Hebrew
277	US8ICL	ICL EBCDIC 8-bit American
278	WE8ICL	ICL EBCDIC 8-bit West European
279	WE8ISOICLUK	ICL special version ISO8859-1
351	WE8MACROMAN8	Mac Client 8-bit Extended Roman8 West European
352	WE8MACROMAN8S	Mac Server 8-bit Extended Roman8 West European
353	TH8MACTHAI	Mac Client 8-bit Latin/Thai
354	TH8MACTHAIS	Mac Server 8-bit Latin/Thai
368	HU8CWI2	Hungarian 8-bit CWI-2
380	EL8PC437S	IBM-PC Code Page 437 8-bit (Greek modification)
381	EL8EBCDIC875	EBCDIC Code Page 875 8-bit Greek
382	EL8PC737	IBM-PC Code Page 737 8-bit Greek/Latin
383	LT8PC772	IBM-PC Code Page 772 8-bit Lithuanian (Latin/Cyrillic)
384	LT8PC774	IBM-PC Code Page 774 8-bit Lithuanian (Latin)
385	EL8PC869	IBM-PC Code Page 869 8-bit Greek/Latin
386	EL8PC851	IBM-PC Code Page 851 8-bit Greek/Latin
390	CDN8PC863	IBM-PC Code Page 863 8-bit Canadian French
401	HU8ABMOD	Hungarian 8-bit Special AB Mod
500	AR8ASMO8X	ASMO Extended 708 8-bit Latin/Arabic
554	AR8NAFITHA711	Nafitha Enhanced 711 Server 8-bit Latin/Arabic
555	AR8SAKHR707	SAKHR 707 Server 8-bit Latin/Arabic
556	AR8MUSSAD768	Mussa'd Alarabi/2 768 Server 8-bit Latin/Arabic
557	AR8ADOS710	Arabic MS-DOS 710 Server 8-bit Latin/Arabic

ID	名称	説明
558	AR8ADOS720	Arabic MS-DOS 720 Server 8-bit Latin/ Arabic
559	AR8APTEC715	APTEC 715 Server 8-bit Latin/ Arabic
560	AR8MSAWIN	MS Windows Code Page 1256 8-Bit Latin/ Arabic
560	AR8MSWIN1256	MS Windows Code Page 1256 8-Bit Latin/ Arabic
561	AR8NAFITHA721	Nafitha International 721 Server 8-bit Latin/ Arabic
563	AR8SAKHR706	SAKHR 706 Server 8-bit Latin/ Arabic
565	AR8ARABICMAC	Mac Client 8-bit Latin/ Arabic
566	AR8ARABICMACS	Mac Server 8-bit Latin/ Arabic
590	LA8ISO6937	ISO 6937 8-bit Coded Character Set for Text Communication
797	US8NOOP	No-op character set prohibiting conversions
829	JA16VMS	JVMS 16-bit Japanese
830	JA16EUC	EUC 16-bit Japanese
832	JA16SJIS	Shift-JIS 16-bit Japanese
833	JA16DBCS	IBM DBCS 16-bit Japanese
835	JA16EBCDIC930	IBM DBCS Code Page 290 16-bit Japanese
836	JA16MACSJIS	Mac client Shift-JIS 16-bit Japanese
840	KO16KSC5601	KSC5601 16-bit Korean
842	KO16DBCS	IBM DBCS 16-bit Korean
845	KO16KSCCS	KSCCS 16-bit Korean
850	ZHS16CGB231280	CGB2313-80 16-bit Simplified Chinese
851	ZHS16MACCGB231280	Mac client CGB2313-80 16-bit Simplified Chinese
860	ZHT32EUC	EUC 32-bit Traditional Chinese
861	ZHT32SOPS	SOPS 32-bit Traditional Chinese
862	ZHT16DBT	Taiwan Taxation 16-bit Traditional Chinese
863	ZHT32TRIS	TRIS 32-bit Traditional Chinese
864	ZHT16DBCS	IBM DBCS 16-bit Traditional Chinese
865	ZHT16BIG5	BIG5 16-bit Traditional Chinese
866	ZHT16CCDC	HP CCDC 16-bit Traditional Chinese
870	AL24UTFSS	Unicode UTF-8

ID	名称	説明
997	JA16TSTSET2	ASCII-based 16-bit Test Character Set
998	JA16TSTSET	Shift-sensitive ASCII-based Test Character Set

### A.4.1 非常に大きい正数または負数

Oracle Express は非常に大きい正数または負数を格納することが可能です。ほとんどの場合、これらの数値は Reports Developer で簡単に表示できます。ただし、数値がある範囲を超えると Reports に表示することはできません。Express の 10 進数  $x$  が次の範囲にあると、「範囲外データ・エラー」メッセージが表示されます。

```
x > 9.999999999999999999999999999999 * 10125  
x < -9.999999999999999999999999999999 * 10125
```

### A.4.2 非常に小さい数値の丸め

Express は、小数点以下の桁数が何百とある 0 より小さい数のような、非常に小さい 10 進数を格納することが可能です。ほとんどの場合、これらの数値は Reports で簡単に表示できます。ある範囲を超えた数値をゼロとして、レポートにゼロと表示するか、「データ丸めエラー」というメッセージを表示するかを指定する設定を使用できます。設定は次の範囲の Express の 10 進数  $x$  に影響を与えます。

$$-1 * 10^{-125} < x \leq -4.94065645841246544 * 10^{-324}$$

$$4.94065645841246544 * 10^{-324} \leq x < 1 * 10^{-125}$$

### A.4.3 丸め設定の指定

丸めの設定を指定するには、設定が有効になるように `xrb.ini` ファイルを作成または変更します。次の手順ではファイルの仕様を作成する方法について説明します。

1. Oracle8 を実行中のコンピュータ上で、ORACLE\_HOME¥BIN ディレクトリの xrb.ini というファイルを探します。ファイルが見つかったら、ステップ 3 に進んでください。ファイルがない場合はステップ 2 に進みます。
2. テキスト・エディタで、ORACLE\_HOME¥BIN ディレクトリに xrb.ini というファイルを作成します。
3. テキスト・エディタで、ファイルの [Options] セクションへスクロールします。ない場合はこのセクション・ラベルを作成します。

4. ZeroSmallNumbers 設定がある場合はその値を編集します。ない場合は、設定を作成します。次の値のいずれかを指定します。

値	説明
0	レポートに、非常に小さい数値を表示する代わりにエラー・メッセージを表示します。
1	非常に小さい数値を丸めてゼロとしてレポートに表示します (デフォルト)。

5. 変更を保存しファイルをクローズします。

#### A.4.4 丸めの設定例

次の例は丸め設定の設定例を示しています。

```
[Options]
ZeroSmallNumbers = 0
```

### A.5 階層構造の Express データのインデント

Oracle Express データは、階層構造すなわち複数のレベルで格納される場合もあります。デフォルトでは、これらの階層はシングルバイト空白文字で 2 つ分インデントされて、レポートに出力されます。インデントに使用する文字のタイプおよび各データ・レベルのインデントの間隔は、xpdata.ini ファイルを編集すると変更できます。

1. Oracle Reports Developer を実行しているマシンで、ディレクトリにある ORACLE\_HOME\BIN\xpdata.ini をオープンします。
2. xpdata.ini ファイルが存在しない場合は、テキスト・エディタを使用して作成します。
3. HierChar= までスクロールします。この設定項目は、ファイルの [XRUI] セクションにあります。

HierChar= には、シングルバイトの空白として使用するインデント文字を指定します。この設定項目には、アスタリスク (\*) やダッシュ (-) などのキーストローク文字を指定することもできます。これらの文字を指定するときは、次に示すように引用符で囲んでください。

```
HierChar="*" 
```

4. HierIndent=2 にスクロールします。

この設定項目には、0 ~ 10 までの整数のいずれかを指定できます。0 を指定すると、インデントが解除されます。1 ~ 10 までの値は、インデントに使用されるシングルバイト文字の数を示します。デフォルトの設定値は 2 です。

5. 変更を保存しファイルをクローズします。

## A.5.1 階層データの設定例

xpdata.ini ファイルに、次のように設定したとします。

```
HierChar="+ "  
HierIndent=4
```

レポートの出力は、次のようなフォーマットになります。

```
Great Britain  
+ + + + England  
+ + + + + + + London  
+ + + + + + + Salisbury  
+ + + + Scotland  
+ + + + + + + Edinburgh  
+ + + + + + + Glasgow  
United States  
+ + + + California  
+ + + + + + + Los Angeles  
+ + + + + + + San Francisco  
+ + + + + + + San Jose  
+ + + + Pennsylvania  
+ + + + + + + Philadelphia  
+ + + + + + + Pittsburgh
```

# 第 III 部

---

索引





---

# 索引

## 数字

---

3 階層環境での実行, 14

## C

---

CD-ROM の内容, 11

## E

---

Express の 10 進数  
非常に大きい正数, 60  
非常に小さい数値, 60  
負数, 60  
丸め設定の指定, 60  
例, 61

## H

---

http アドレス, 39

## M

---

Microsoft Windows, 12

## O

---

ODBC サーバー, 13  
Oracle Application Server (OAS), 13, 26  
Oracle Express  
Reports の構成, 43  
キャラクタ・セットの指定, 49  
クライアント構成, 45  
サーバー構成, 45  
バッファ・サイズ, 47

バッファ・サイズの指定, 48  
丸めの指定, 60  
Oracle Installer, 32  
起動, 18  
Oracle Net8 Easy Config, 22  
Oracle Reports  
Oracle Express データを使用するための構成, 43  
ORACLE\_HOME に関する考慮事項, 13  
Oracle8, 13  
Oracle8i, 13  
ORA ディレクトリ, 26

## P

---

Personal Oracle, 13

## R

---

RAM の要件, 12

## S

---

Schema Builder 用の格納場所, 31  
Software Asset Manager, 19, 20  
SQL  
SQL スクリプトのインストール, 32  
SQL スクリプト, 32

## T

---

tnsnames.ora ファイル, 22  
TNSNAMES エントリ, 22

## U

---

URL、情報源, 39

## W

---

Web サイト, 39

web による利用, 14

Windows システム、サポートされる, 12

## あ

---

アクセス

データベース表へのアクセス権限の取消し, 34

データベース表へのアクセス権限の付与, 33

アップグレード

アプリケーション, 27

以前のリリース, 25

アプリケーション

アップグレード, 27

再コンパイル, 27

再配布, 28

アプリケーション・サーバー, 13

アプリケーションの格納, 31

アンインストール, 29

## い

---

以前のリリース, 25

インストール

SQL スクリプト, 32

アップグレード・インストール, 25

カスタム, 19

新規インストール, 17

標準, 19

## お

---

オペレーティング・システムの要件, 12

## か

---

カスタム・インストール, 19

Software Asset Manager, 19

## き

---

起動

Oracle Installer, 18

キャラクタ・セット、Oracle Express の

言語, 49

格納, 54

指定, 49

地域, 51

例, 49

キュー・カード, 11

旧リリース, 14, 25

## く

---

クイック・ツアー, 11

クライアント / サーバー環境での実行, 14

## こ

---

構成

TNS 名, 22

互換性, 39

## さ

---

サーバーの要件, 12

サーバーへの接続, 22

再コンパイル、旧アプリケーション, 27

再配布、アプリケーション, 28

削除、製品, 29

サポート製品、提供される, 11

## し

---

実行環境についての選択肢, 14

習得、機能, 39

資料

関連, viii

新規購入者, 39

新規購入の場合の考慮事項, 17

新機能の説明, 39

## せ

---

接続、サーバーへの, 22

前提条件, vii

## そ

---

ソフトウェア  
提供される, 11  
要件, 12

## て

---

データベース・サーバー, 12  
データベース表  
SQL スクリプトのインストール, 32  
アクセス権限の取消し, 34  
アクセス権限の付与, 33  
アップグレード, 35  
削除, 34  
作成, 31  
バックアップ, 35

## な

---

内容、CD-ROM, 11

## は

---

ハードウェアの要件, 12  
バックアップ、データベース表, 35  
パッケージの内容, 11  
バッファ・サイズ、Express の  
指定, 48  
について, 47  
例, 48

## ひ

---

表  
SQL スクリプトのインストール, 32  
アクセス権限の取消し, 34  
アクセス権限の付与, 33  
アプリケーションの格納, 31  
作成, 31  
データベース表  
削除, 34  
データベース表のアップグレード, 35  
バックアップ, 35  
表記規則, vii  
標準インストール, 19

## へ

---

ヘルプ、オンライン, 11

## ま

---

マニュアル  
提供される, 11  
マニュアル前提条件, vii  
マニュアル、提供される, 11

## め

---

メモリの要件, 12

## よ

---

要件  
RAM, 12  
オペレーティング・システム, 12  
ソフトウェア, 12  
ハードウェア, 12  
メモリ, 12

## り

---

リリース・ノート, 11, 15  
リリース、以前の, 14

